

In a Corner of the Corner
Wakagi Efu

すみこのすみこ

わがぎえふ



双葉社

すみこの
すみこ

In a Corner of the Corner
Wakagi Efu

わがぎえふ

双葉社

すみっこのすみっこ

著者……………わかざえふ

発行者……………井上功夫

発行所……………株式会社双葉社

〒二六二 東京都新宿区東五軒町三番二八号
電話 〇三・五二六・四八二八(営業)

〇三・五二六・四八三七(編集)

印刷所……………慶昌堂印刷株式会社

製本所……………株式会社若林製本工場

© Efu Wakagi 1993 Printed in Japan

落丁・乱丁は本社にてお取り替えいたします。
定価・発行日はカバーに表示してあります。

ISBN 4-575-23150-9 Coops

すみこのすみこ

目次

【第1章】私のすみっこ

7

土道が私の遊び場だった

8

太閤さんの向かい

13

少食生活

16

酔っぱらいは男らしいという神話について

21

貧乏なんてウラウラウラ

22

体育会系のOL

26

酒とバカの日々

30

人間は何歳で大人になれるのか

32

進化するベッピン!

36

ふろくがすきっ!!

39

美しさは罪

41

おふろで読書

43

母の新境地

46

現代住宅難解消法?

48

声体不一致!?

50

脱ぐ!!

53

お前なにを言うとなねんっ

56

想い出の「カロリー」

58

無添加食品恐るべし

62

昔の恋人

65

イツツ賞タイム!

68

【第2章】友達のすみっこ

71

歩け歩け運動の友①

チチ松村

72

歩け歩け運動の友②

桂都丸

76

歩け歩け運動の友③

福井玲子・山藤貴子

79

歩け歩け運動の友④

石田長生

83

歩け歩け運動の友⑤	桂吉朝	86	歩け歩け運動の友⑥	香寿たつき	90
歩け歩け運動の友⑦	ひさうちみちお	94	歩け歩け運動の友⑧	いのうえひでのり	97
歩け歩け運動の友⑨	清水興	101	歩け歩け運動の友⑩	藤田幸恵	105
歩け歩け運動の友⑪	森かずお・なぞのおんなキムチ	108	歩け歩け運動の友⑫	升毅	112
歩け歩け運動の友⑬	桂九雀	116	歩け歩け運動の友⑭	森毅	119
歩け歩け運動の友⑮	みやなおこ	123	歩け歩け運動の友⑯	中島らも	127

【第3章】大阪のすみっこ

花博の裏に怪人アリ	132	森に集う日	134
商売人のおばさん主義	136	息子達の悲劇	138
映画館で「きれいな大阪」見物	140	関西弁のケンカ言葉は意味不明	142
なんでこんなに明るいのか!?	144	なめとんのか!! とんでもない占い	146
野次の傑作	149	みんな友達!?	151
奈良娘のお見合い	153	文化遺産はホレ薬	155
大阪弁に負けた朝	157	大阪弁の正しい使用法	160
こいさんの足に迫る!!	163	鍋の底にあるものは?	165

お風呂屋さんが遊び場だ	168
さあさ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい	174
通リゃんせ!	180
らも座長の変身	186
買った、買った〜!	192
引力のある凄い街、新世界	183
漫才レディーにインタビュ	189
大阪の中の大陸	171
コンビニの中の地方食	177

【第4章】世界のすみっこ

ウエルカム上海・その一	196	ウエルカム上海・その二	201
ウエルカム上海・その三	205	「ジャンボ」の国・その一	208
「ジャンボ」の国・その二	213	見よ あれがパリの灯だ	220
シヤムの熱い日	223	香港・その一 バック・トゥ・ザ・お寺	229
香港・その二 名物に本物なし	231	香港・その三 観光してみるものだ	235
香港・その四 愛しい男達の住む街	238	はじめての団体旅行〜ソウル	241
1992年の仙人の山	246		
あとがき	251		

ふきふきのふきふき

【装画】南伸坊

【装幀】日下潤一

【カバー写植印字】前田成明（本文扉・目次・初出・奥付・帯も）

【本文イラスト】わかぎえふ

【編集】村上知彦（チャンネルゼロ）

【第一章】私のすみっこ

土道^{どみち}が私の遊び場だった

だいぶ前のことだが、友達^{ともだち}の記憶散歩につき合ったことがある。

劇団をやっているので、年に何回かある東京公演の最中だった。その日は夜だけしか芝居がなく、昼はそれぞれ自由行動をしている日だったのだ。

「ちょっと記憶力確かめてくる」。彼が突然言い出した。聞けば小さい頃、ちょうど6歳になるまで東京に住んでいたそうで、最寄りの駅まで行って、自分が覚えているとおりにどうか見てくるという。

おもしろそうなので、南阿佐ヶ谷という所まで一緒に行ってみた。

彼はまず、駅から自分の家があったところまで歩き出した。

「えっ……と、この道を確か曲がるんや」。言葉は東京弁の名残りもない。

彼の記憶するとおり、細い路地を通り抜けると、元の家へたどり着き、それから6歳の子供が行動した範囲を歩いてみた。

お菓子屋、幼稚園、文房具屋、オモチャ屋：半径500メートルぐらいの小さな行動範囲だが、彼は頭の中に鮮明に蘇った過去を楽しんでいたようだ。

他人の記憶とはいえ、おもしろい散歩だった。なぜならば私も大阪の中心部で育ったので、似たような店や場所を自分のテリトリーに入れて行動していたからだ。

東京も大阪も、下町の子であれば、あまり変わりはないらしい。

子供の頃、我家の前は半分が土道で、隣の家が少し出っ張って建っていたので安全な遊び場になっていた。

従兄達とそこを掘り返したり、水で土をこねてドロだらけになって遊んだものだ。一度、いつも掘らないところまで深く掘ったら、骨が出てきて、きゃーきゃー騒いだことがある。多分、犬かなにかが死んで埋めてあったものだろうが、子供にとっては大事件だった。

「もし、警察の人が来て、死体の骨について聞いても知らん顔をしていような」とか、子供どうしでわけの分からない誓いをたてあった。

この道は、そのまま大阪城のある公園まで通じている。つまり我家の前を5分も歩けば大阪城の一角に通じているのだ。

天守閣に登るまでに約20分。そんな環境にあったせいで、私は大阪城の敷地内にある道場へ剣道を習いに通っていた。

ところが、この大阪城までがまた土道である。しかも、あそこは小さな山と同じで、てっぺんにお城がある。

雨が降ると、上のほうからものすごい勢いでドロ水が流れてくるので、道場に着く前に頭まで茶色になったこともあった。

汚い話だが、その途中に自衛隊の人達の宿舎があり、トイレが汲み取り式だったので、雨が降るとそれが流れ出してきた、その後何日間かは栄養度の高い土を踏み越えて歩かねばならなかった。

大阪の真ん中とはいえ牧歌的なものである。

そうやって私は半径500メートルの行動範囲を謳歌する一小学生だった。

しかし、そんな子供のうえにも時代の波は押し寄せてくる。1970年のこんにちは、

である。失礼：1970年の万博である。

私が小学校5年生の時に万博が始まったので、多分その2、3年前からなのだろう、道という道がきれいになっていった。

まず我家の前の土道が舗装されることになった。隣の家は立ち退きになって、おばさんが引越しの挨拶に来た。

アスファルトが煮えた不気味な匂いがいつもするようになり、友達と、いつかこの道が掘り返される日が来たら、これを見ようと記念のタイムカプセルを土に埋めた（何を入れたか忘れましたが）。

うちも箱庭ほどの庭がなくなり、大阪市に買い上げられた。

駅の方では地下鉄を造ろうと道を掘り返したら、戦争中の不発弾が見つかって大騒ぎ。友達が一家ごと避難してきて、修学旅行でもないのに枕投げに興じた。

ただの小山であった大阪城に通じる道も、外国からの観光客が来るだろうからと舗装され、自衛隊のおじさん達も宿舎ごと引越してしまった。

デコボコしていて危いから自転車で行っちゃいけませんと言われていた所へも、スイス

イッで行けるようになり、街から石コロというものが消えていった。

それまで躓いていたあの憎い石コロのせいで、膝や肘に嫌というほど砂をすりこんでいたのに、今では道がツルツルのスベスベっなのである。

子供心にも、街中がきれいになって行くスピードが分かって、なんとなく浮かれたものだ。

大阪中が、お客さんが来るから片付けているお母さんでいっぱいになったという感じだろうか。ともかく凄いスピードで道はきれいに、建物はビルになっていった。

やがて、万博が始まった頃には、さすがに半径3キロメートルほどの行動範囲を持つ子供に成長していた私だが、相変わらず剣道には通っていた。

あの舗装された道を外人のおじさんやおばちゃんが大型バスで登ってくる。

そして剣道着をつけた私を見て「オーっ・リトル・サムライ」と歓喜の声をあげ、写真をパチパチ撮って帰っていった。

ピンクのワンピースに白いハイヒールを履いたアメリカ人のおばちゃんに頭を撫でられながら「この人らが来るから、うちの庭がなくなったのか」と、無理な三段論法をたてて、

納得もした。

文明が進化する。暮らしが良くなる、ハイテクがなんちゃら、そんなことはよく知らないが、万博前後の大阪の変わりようは子供心にもおもしろい思い出だ。

今では、土に触っただけで、ドロコン病になる子供がいるらしい。土道なんて見たこともないのだろうか。

太閤さんの向かい

小学校の低学年の頃、市内の子は中央市場を見学に行く（全部かどうか知らないが、うちもあった）。

魚市場で働く人々を社会の授業で見学させるわけだが、もちろん生徒の側は見学なんてどうでもいい。「外へ行ける」ので嬉しくてたまらないだけだ。

しかし、行き先が魚市場となると、京都は嵐山へ遠足に行った時と違って走り回って遊ぶという感じではない。私達が行った時間は今から思えば朝の取引はとくに終わって活気がある所というより、荷物置場という雰囲気だった覚えがある。

広くて、箱のたくさん置いてある生臭い場所へ連れて行かれ、子供等はシュンとしていたのかも知れない。突然、案内役のおじさんが「ここに大阪中の魚が集まっとったんやで、みんなの家で今日、食べる魚もや。大阪は太閤さんの頃から天下の台所やからなー、日本一なんや」というような元氣付けをした。

彼が「みんな太閤さん知っとるか？」と言った時、クラスの誰かが「太閤さん、うちの向かいや」と言って爆笑になった。

天下の台所とは米が集まってきたからいうのだと後で知って、魚市場のおっさんに突っ込みに行きたかったが、おそらく大阪中の大人が同じような自慢をどこかで毎日しているのだろう。

ところで家の向かいに太閤さんが住んでると言ったクラスメートは、嘘をついたわけではない。私達は大阪城へ歩いて行ける範囲内の校区から来たのだ。